

【小学校3～4年生】 「ギャングエイジ」の安心

小学校3、4年生。この時期から子供は、「教師と子供」「子供同士の共同体」の2つの世界にいて、二重生活を送りながら、シビアに大人を見るリアリストになっていってと言われています。子供同士の仲間意識が強くなり、小さな集団を作るということは発達段階の一つですが、時にいたずらや悪さをしやり、時に荒れたりすることもあるため「ギャングエイジ」とも呼ばれます。

幼児期の家や幼稚園での「親と子」「先生と自分」だけの1対1関係から、学校生活というその他大勢がいる社会にステージを移し、集団の中で、競争と協力、対立と妥協、主張と譲歩、自愛と他愛など、相反するものを調和させながら集団に関わるという社会勉強をしていきます。この年齢の集団は、必ずしも全員がいたずらや悪さをするわけではなく、集団で活動すること自体を楽しんでいるのですが、彼らは、教師の言うことを聞くだけではダメで、見つからないように悪戯をして教師を刺激したりして、仲間意識を強めたりもしています。

社会の中で生きていく力は、経験してこそ身につくもので、残念ながら、座学で身に付けることは難しいのですが、ギャングエイジの子供たちは、集団の中での「押したり・引いたり」「七転び八起き」等いわゆる「社会的な交渉術」を、幼いなりに経験し始めていると考えることができます。社会に出てから必要とされる、いわゆる「社会的な交渉術の幼い版」を経験し始めているのが、このギャングエイジなのです。

子供たちは、このような小集団(いたずら仲間)に入れなかったり、仲間外れになりそうになったり、と、遊びとは裏腹に結構スリリングな人間関係の中で、生きているので、親が思うより、毎日消耗していることもあります。なので、家に帰ってきたときの「おやつよ～」とか、「今日何かあったの？」という何気ない声かけが、ギャングエイジの子供をホッとさせ、エネルギーチャージへと向かわせます。る気がします。家に帰ってきて、懐かしい1対1の安心感に身を包まれたら、ほっとして、「よっしゃー！」とまた明日、学校に出ていけるのではないかと思います。

また、この頃から、子供の集団の中では、子供は仲間同士の秘密を守らなければいけないという立場ができるので、大人はそこをわかってあげなくては、子供を守ってあげることはできません、難しいですね。子供の様子をよく見て、変化に気づいたら見守ったり声をかけるなど親としての行動がとれるようにしておきましょう。

執筆：認定特定非営利活動法人育て上げネット 「結」相談員 森 裕子・墓田 薫

「ニート・ひきこもりの子をもつ親の会『結』」
(運営：認定特定非営利活動法人育て上げネット)

若者の「働く」と「働き続ける」を実現するために、若年無業者就労基礎訓練プログラム「ジョブトレ」など、多方面からの支援を行っている「認定特定非営利活動法人育て上げネット」の活動の一つで、親をサポートするための会。1か月ごとの定期相談やすぐにも実施できる「接し方・伝え方」ワークショップ、親同士の気軽な茶話会などを提供している。

